

第11部会

他に代替が効かない一部の特殊な処方については、『医心方』は『僧深方』から長文を引用する。こうした処方には、道教系統の万能薬があり、仏教が中国で拡大した六朝期に、医学の分野で、道・仏の交流が盛んに行われていたことを示唆する。これは当時の僧侶・道士の社会的役割と出身階層を考える上で重要である。

『外台秘要方』を『医心方』が参照したと考えられる箇所は、巻四の「治髮令生長方第一」以下美容に関する部分などである。しかし、ここでも、丹波康頼は、『外台秘要方』を引き写すのではなく、同じ薬方に対し『外台秘要方』とは異なった出典を探して、編纂しようとしている。『医心方』が『外台秘要方』を引くのは、五〜六カ所(数え方によって異なる)であり、残りは、類似の処方があっても、できるだけ別な原典に当たっている。

『僧深方』など古医書輯佚に際して、「又云」「又方」という記述が問題になるのだが、八重津洋平氏の「故唐律疏議」(滋賀秀三編『中国法制史 基本資料の研究』東京大学出版会)によると、敦煌・トルファンから出土した唐代の律疏では、律文を分割して議論する場合、第二段以下の律文の部分の頭には「又云」の二字を冠する。恐らく、『外台秘要方』や『医心方』の「又云」「又方」も、唐代のこうした書式に倣ったものと考えて良いだろう。

『医心方』は、日本に渡来した唐代までの中国・朝鮮の医学文献を基に、日本の実情に合わせて、庶民から貴族まで、身近な薬草から、高貴薬までを含む、あらゆる階層の患者に対応した

薬方を収める。丹波康頼が目指したのは、医学に精通していなくても、開きさえすれば、治療法が見つかる便利な書物であった。『外台秘要方』が名医のための専門マニュアルであるとすれば、『医心方』はひろく治療を求める人のために開かれたマニュアルである。(本発表は平成二十一年度文部科学省科学研究費の助成によるものの一部である。)

中国における「維摩詰」語釈の変遷

山口 弘 江

『維摩経』は中国及び東アジア文化圏に多くの感化を与えたが、特に思想面での影響は鳩摩羅什が弘始八年(四〇六)に訳出した『維摩詰所説経』の登場と、訳者羅什やその高弟達が一駆的に注釈を施したことが大きな契機となっている。その後、南北朝時代から唐代にかけて諸師が競って『維摩経』を講じたが、羅什訳の経題に見える「維摩詰」に対する各師の語義解釈を比較すると、変遷の経過が見られるごとくである。

梵語 Vimalakīrti は経の主人公の名であり、「汚れなく名声の高い者」との意でその人格を示す語である。その音写語である「維摩詰」の語は、既に支謙訳に現われ、羅什も『維摩詰所説経』以外の經典には「毘摩羅詰」が用いたが、翻訳に際しては最終的に梵語により正確な「毘摩羅詰」を経題に用いず、支謙訳以来の伝統を重視してか、「維摩詰」の音写語を採用した。

この「維摩詰」の語に対し、『維摩経』解釈の基調とされる『注維摩詰経』を見ると、鳩摩羅什と僧肇の「浄名」、竺道生の「無垢称」と意識語に二種があり、また僧肇は維摩詰を法身の大士と定義したことが注意されるが、特に僧肇の釈に見られるような仏身論における位置づけは、後の解釈に大きな影響を及ぼしている。

次に浄影寺慧遠の『維摩経義記』では、旧説の二種の意識を「浄名」を正翻、「無垢称」を傍翻として会通する。また維摩詰を法身とすることや「権化無方」といった表現は僧肇釈を踏襲したものと見えよう。また、慧遠の釈については嘉祥大師吉蔵の中に影響が見られることは留意すべき点である。その吉蔵の釈には真諦や廬山慧遠の弟子とされる曇詵の説が紹介されるところが新しく、また三論教学らしく「強立名字」として解釈するなどの独自性が見られ、更に本迹論を適用する点などは僧肇の『注維摩詰経序』に見られる思想の継承と考えられる。ただし、前述の如く、「示同塵俗而心栖累表」といった句や浄徳を強調する文脈からは、慧遠の釈を参照した可能性が窺われる。

これらに比し、智顛の説では旧説を継承する面を持ちながらも、その中心は誤読を積極的に行った独創的な解釈にあった点が特徴的であった。智顛は意識語として「浄無垢称」という語を「浄・無垢・称」と三分することにより、三身説や三観、三智などに対応させ用いるが、そもそも「浄無垢称」は Vimala が重複したものであり意味として適切ではない。更に、「称」を名詞ではなく動詞に取り、「称機（機にかなう）」などと用いる。このような用法により、智顛がこの語に菩薩の教化の意義

を見出し積極的に用いた意図が看取されるのである。このような理解は、漢字そのものに立脚した結果であることは明らかである。宋代に編纂された『翻訳名義集』には、維摩詰の語釈をする中、智顛の法統を嗣ぐ智円の説を用いつつも、その元となつたはずの智顛の説が紹介されなかつたことに明らかな通り、智顛の語義解釈は天台教学の範囲では他の概念との有機的な構造を構築する上で意義が高かつたが、言語学的には矛盾が多いため、それが一般的な解釈として受容されるには至らなかつたようである。ただし、それ自体には意味を持たない語を、教学体系の中に組み込むことで積極的に意味を付加した結果、宗教的な意義にまで昇華させるほどの解釈を残したという意味において、智顛の説は非常に興味深い。

羅什から慧遠、智顛、吉蔵たちまでは約二百年の時間的差があるが、我々は「維摩詰」に対するこれらの解釈を比較する時、その間に確立した教学を背景として、単なる語義解釈からの脱却、そして主体的な解釈への試みた中国仏教の発展の軌跡を看取するのである。

中国における菩薩戒について

久田 静 隆

大乘教典の中でも古いものの中では、大品般若経で無所得空の立場で十善道を実践することが戒波羅蜜であると説き、また